

talk! talk! talk! 「たったひとつのたからもの」 著者・加藤浩美さん



「たったひとつのたからもの」 著者  
加藤浩美さん

ある男の子の生涯が数枚の写真とコピーで紹介され、最後にその子をぎゅっと抱き締める父親の写真が写し出される、そんなCMを見たことはないだろうか。写真に写っていたのは、ダウン症にともなう心臓の合併症で余命わずかと言われながらも6年の年月を精一杯生きた秋雪くんと父。そしてそれらの写真を撮影したのが秋雪くんの母、加藤浩美さんだ。6年間、秋雪くんとのおい出を、生きている一瞬一瞬を膨大な枚数の写真に残し続けた加藤さん。なぜカメラを向け続けたのか、加藤さんにとって写真とはどんな存在だったのか、思い出のつまった写真と共に、その思いをうかがった。

プロフィール

かとう・ひろみ。1964年、埼玉県生まれ。高校で写真部に入りNikon FEを購入、写真撮影を始める。1982年、就職。翌年結婚し、1992年長男秋雪くん誕生。生後1ヶ月でダウン症と判明、それにともなう心臓の合併症で1年の命と告げられる。6年あまりを精一杯生き、1999年秋雪くん死去。浩美さんはその間、数えきれないほど家族の写真を撮り続けた。2000年2月、家族で海に行ったときに写した1枚を明治生命フォトコンテストに応募し入賞する。2000年5月より明治生命の企業CM「あなたに会えてシリーズ-愛情篇」で受賞者の1人として写真が紹介される。2001年8月より「たったひとつのたからもの」の放映開始。ロンドン国際広告賞、ACC賞など数々の賞を受賞。2003年4〜9月「たったひとつのたからもの-懸命篇、友達篇」が放映され、全国で話題となる。2003年11月に著書「たったひとつのたからもの」(文芸春秋)を出版、多くの反響を呼ぶ。現在は秋雪くんが通っていたいずみの学園で写真を撮るボランティアを続け、子供たちの日常を記録に残している。

思いがけず始めることになったカメラ いつのまにか1番の趣味に



2歳になる直前、ずっと見せたかったという海に初めて行った。波に怖がることなく楽しそうにしていたそうだったのかよく分からないんです。

カメラを買われたのもその頃ですか？

そうですね。もちろん自分で買えるようなものではありませんでしたから、両親に泣きついて何とか説得して買ってもらったのがNikon FEと50mmのレンズのセットでした。それが当時1番メジャーなセットで凄く人気だったんです。高校時代はずっとFEで撮っていました。持っているとは何かリッチな気分になるんですよ。もちろん使いやすいし、持った感じも何だかいい写真が撮れそうって感じがするんですよ(笑)。そのFEは今家にはないんです。今現在、主に使っているカメラはF4とF100ですね。

それ以来カメラはご趣味で続けられているんですね。

はい。就職しても結婚してもカメラは第1の趣味です。写真を撮るためにどこかに行くということはあまりなかったのですが、出かけるときには必ず持って行くものです。

では、秋雪くんが生まれたときにカメラを向けるようになったのは自然な流れだったんですね。

ええ、カメラを秋雪に向けるのは当たり前のごとのようでした。カメラはいつも生活の中にあっただけのものでし、「新しいモデルができた!」という感じでした。庭の花が咲いたというのと同じかもしれないですね。咲き始めたからその変化を撮りたくなるといふ。そんなこと言ったら花と一緒にするなって秋雪に怒られちゃうかな(笑)。

毎日毎日、その瞬間を生きる 秋雪の全てを写真に残したかった

撮るペースはどのぐらいだったのですか？

なるべく押さえ目にしていても2日に1本ぐらいは撮っていました。ただ、調子に乗ると1、2時間であっという間に1本、2本いってしまうときもありましたね。でもフィルムですからね、経済的に大変だぞ、というのは常に頭に置きながらでしたけど.....(笑)。

主人はいつも呆れていましたよ。まだ起き上がったりお座りもできない頃は横になっているだけです。それでも撮っていましたから、他人が見たら「どこが違うの?」という状態の写真がたくさんありました。「でも表情が違うじゃない、さっきとは角度が違うじゃない」って、それだけで私はよかったです。昨日と違うというだけで撮りたかったんです。

我が子をたくさん撮ってしまうというのは親心でしょうか。

枚数が多くなったひとつの原因として秋雪の病気のことが影響していたと思います。でも、もともと写真が好きで生活の中にカメラがあることが普通でしたから、生まれたから「さあ、撮ろう」というよりは、カメラ好きの意地と申すかこだわりと申すか、自分が1番かわいく撮ってあげようという思いもありましたから、それまでの延長の中での行動です。

秋雪くんの病気のことで気分がどうしても沈んでしまうようなこともあったかと思うのですが、たとえばカメラを向けることが気分転換になったりということはありませんでしたか？

ああ、それはありましたね。カメラを持っていると、ちょっと距離をおいて現実を見ることができたんです。

もちろん、秋雪は長生きできないかもしれないから生きている間のいろいろなことを写真で残したいという気持ちは大前提にあって写真は撮っていたんです。だから写真を撮るたびに秋雪を写真に残せているんだという感覚になったんです。現像が上がって写真になると、「ああ、今日はこんな風な顔が撮れたな」と思える。それが支えといいますか、辛い部分を見るのではなく、とにかく今できることをやらなきゃいけないという思いになったんです。

秋雪くんは今こうして生きているんだということを実感できるような。

はい。もちろん現実を見ると辛いこともたくさんあるんですが、毎日毎日、その瞬間のいろいろな秋雪が1枚、2枚と写真として残っている、自分の中でそれが残せているなということを感じられたんです。

ところで、秋雪くんはカメラを意識していたのでしょうか？

小さなお子さんはよく、カメラを向けるとポーズを取りますよね。固まってみたりピースをしてみたり。そういうことは秋雪の場合、10に1もないぐらいでしたね。全く、我関せずというかね。もしかしたら「お母さんまた始まった」「またやってるなあ」という、半ば呆れ顔としようがないなあという気持ちはあったのかも無理ですね（笑）。

ですがどの写真を拝見しても、秋雪くんは本当に表情が豊かですね。

私が枚数を多く撮ったからこれだけの表情が撮れたということではなくて、本当に秋雪はいろいろな表情をするんです。だから、撮っていておもしろかったし、楽しかったし、やりがいがあつたし、被写体としては最高でしたよ。たぶん、私の中ではずっと1番の被写体です。



2歳半ぐらいの頃の写真。近所の公園での1枚



お家でプール遊び。水遊びは秋雪くんが一番好きな遊び

## 多くの人に見てもらいたかった、伝えたかった“たったひとつのたからもの”

明治生命のフォトコンテストに写真を応募されたのはいつ頃ですか？

秋雪が1999年の1月に亡くなって、翌年の2月ぐらいだったと思います。それで3月に入賞の内定をいただいたんです。

この写真のタイトル「たったひとつのたからもの」はどのような意図でつけられたのですか？

「たからもの」という言葉は最初から使いたいと思っていたのですが、その言葉に何を付けるとすんなりと自分の思いが伝わるのかなと思ったとき、このタイトルになったんです。

3人が今ここにいるという現実をタイトルにしたかったんです。写真を見て、秋雪がたったひとつの宝物なんだという解釈をされる方もいらっしゃるのですが、私としては、写っている2人と写している自分、そして3人でいる時間すべてが宝物だということを言いたかったんです。タイトルとしては強すぎるかな、ちょっと仰々しいかなという気もしたんですが、でも、最終的にはもうこれしかないと思いました。

そもそもフォトコンテストに応募しようと思ったのはなぜですか？

あの当時は秋雪のことを、秋雪の写真をいろいろな人に見てもらいたいという思いがあったんです。正直に言うと、入賞したらCMに使われるというのを聞いて応募したんです。運が良ければCMを通して多くの人に見てもらえるかもしれないと思いました。

実際にCMとして放送されていかがでしたか？

最初のCMで映ったのは30秒のうちのたった2秒なんです。ほんの一瞬です。でも、そのほんの一瞬を見て明治生命に感想をメールで送ってくれた方が1人、2人いたんです。放送直後だったと思います。感想を持つことはあっても、わざわざメールでそれを送ってくれるというのはなかなか労力のいることですよ。でもその方たちはそうやって意見を言ってくれた、それが凄く嬉しかったんです。1人でも2人でもあの写真を見て何かを感じてくれたんだと思ったら、ちょっとでも何か伝わったのかなと思ったら、それは本当に嬉しかったですね。

その後、ロングバージョンのCMになり、秋雪くんとの日々が本にもなりました。これだけ反響があつたのも、多くの方が加藤さんの写真を見て何かを感じ取ったからではないでしょうか。

本に関しては自分の中で、撮った写真と書きとめていたものを文章にまとめることができ、本として形に残せたという達成感があったんです。でも本当に多くの方から反響をいただいて、私のところにも、写真に勇気づけられたとか感動したとか、そういった意見をたくさんいただいたんです。秋雪のことも本当にかわいい、かわいって言ってください。逆にどうしてそこまで言うてくれるんだろという不思議な気持ちになりました。

それだけ、この写真の訴える力が大きかったのではないのでしょうか。写真の持つ力の大きさをあらためて実感しました。

ありがとうございます。そう言っていただけると本当にうれしいです。つくづく写真を撮るのが好きでよかったなと思います。これを趣味にできて本当によかった。そう考えると、なんであのとき写真部に入ったのかますますわかりません（笑）。でも、きっかけってそんなものなのかもしれませんね。

## カメラを手放そうと思ったとき 秋雪が私を助けてくれた

現在はボランティアで写真を撮っているそうですね。

はい。秋雪が通っていたいずみの学園という所で、お誕生会などの学園の行事、それから普段の様子も撮りに行ったりしているんですよ。これはもう6年続いています。

ボランティアに行くことになったのは何かきっかけがあったのですか？



「たったひとつのたからもの」。抱き締めているご本人も意識しないほどほんの一瞬何気なくぎゅっとしたところを撮ったのだそう。「子供に親がすがっているみたい（笑）」と加藤さん



上の写真を撮った特別大切だというカメラがこのF4。ボディに写真を撮った日付けが入っている。後に写っているのは「主人にないしよで購入してしまいました！」という、最近愛用機に加わったF6



秋雪が亡くなって2、3ヶ月した頃だったでしょうか、学園の先生方とお母さん方がやりませんかというお話を持ってきてくれたんです。これは後日談なんですけど、放っておいたら危ない、私がそんな風に見えたんだそうです。たしかに自分でもその頃どんなふうに通っていたのか、正直あまり覚えていないんです。それで、これは何とかしなければいけないということで話合ってくださいって、写真が好きみたいだというのは薄々バれていましたから、もし無理でなければ来てくれませんかとお話をかけていただいたんです。

好きなことで元気を取り戻してもらおうと。

はい。正直に言うと、実はそのときにカメラを手放そう、写真を撮るのももう止めようと思っていたんです。あれだけ秋雪を撮っていたのに、それがいきなりなくなると言うことは、私にとってはもう撮る対象がなくなってしまうということなんです。写真を撮るのもカメラを見るのももう辛かったです。1番楽しい趣味だったはずのものができなくなってしまった、それどころか、もうやりたくないと思ってしまった。だからもう手放すしかないかと考えていました。

ところがそのお話をいただいたとき、本当に不思議なんですけど即答していたんです。「じゃあ、やらせていただきます」と。おかしいですよね、捨てようと思っていたのに躊躇なく返事をして。そのときにはもう、気持ちは学園に向かっていたんです。

本能のようなもので、写真を撮るべきだと感じたんでしょうか。

そうかもしれません。やっぱり止められなかったということですよ。タイミングも良かったんです。声をかけてくれた時期が、あれより前でも後でも引き受けたかどうかかわかりません。秋雪はその春から小学校に上がることになっていましたので、もし生きていてもいずみの学園にはもういない。だから学園に行っても不思議と辛くはありませんでした。生きていれば今頃ここに居たのにもう思ってしまったら辛くて行くことができなかつたでしょう。そういう意味でも……親バカかもしれませんが、秋雪が助けてくれたのかなと思うんです。もしかしらあの子がカメラを止めるなって言ってくれたのかなと思うんです。

また趣味を始めるというのは、元の日常生活に戻っていくんだという意志でもありますね。

そういう意味合いは大きいですよ。今の現実をちゃんと見なくちゃというメッセージみたいなものも受け取ったのかもしれない。今あらためてそう実感しています。

いずみの学園での撮影はいかがですか？

本当に楽しいですよ。たぶん、子供達が普段家で見せる顔といずみの学園で見せる顔って違うんですよ。私はお父さんお母さんが見られないお子さんの顔を見ることができると。子供が社会に出ているとき、小さな小さな社会ですが、普段とは違うこんな表情をしていますよというのを見せてあげられるというのがね、おもしろいといえますか、撮っている甲斐があります。「家ではこんな顔をしたことないわ」ってお父さんお母さんに言われると「よっしゃ！」っていう気分になりますね（笑）。

### 「秋雪の写真に勇気や元気をもらえる そう思えることがとても幸せだと思います」

秋雪くんを撮り続けて膨大な枚数の写真を残されたこと、振り返ってみて今どう感じていますか？

病気を持って生まれてから寿命をまっとうする間の記録といったらその通りなんですけど、それだけではないんですよ。体が辛かったこと、しんどいけれどもいろいろな訓練をがんばったこと、必死ことはたくさんありましたが、ちゃんと楽しいこともたくさんあって、それを楽しんでいた秋雪がいたんです。そういう秋雪を写真として残せたことが、本当によかったなと思っています。

写真を見れば、その表情だけでなく撮ったそのときの思い出も一緒に蘇ることもありますね。

そうそう、そうなんです。写真を撮ったときの物語が自分の中に残っていて思い出させてくれるんです。その背景にあるいろいろなこと、がんばったこと辛かったこと、もちろん幸せだったこと楽しかったことも。6年間、3人で過ごした大切な時間を、写真を通して思い出せるということが私には本当に救いなんです。だから写真がもしなかったらどうなっていたでしょう。たぶん辛過ぎたでしょうね。

逆に、写真を見ると思い出してしまっていて辛いということはないのですか？

それは全くありません。辛いというよりは逆に、自分が写真を見るたびに勇気をもらえる、元気をもらえるんです。今になってもそんな風に、あの頃撮った写真でそんな風に感じられるということは本当に幸せだなと思います。

今後も写真は趣味として撮られていくんですね。

もちろんです。いずみの学園にも来ると言われるまで撮り続けたいと思っています（笑）。いずみの学園には3歳から小学校に上がるまでの子供がいるんですが、4月からはもう少し小さいお子さんを預かっている関連の親子教室でも撮らせてもらえることになったんですよ。個人的な趣味に置き換えるのはなんですが、でも、また楽しみがひとつ増えました。

いつか、秋雪の名前の通り、秋に降る雪も撮ってみたいです。真っ赤な紅葉に降る雪を想像すると凄くワクワクします。それから、秋雪と一緒にいったところで、もう秋雪はいないけれどそこに秋雪がいるような、そんな雰囲気のある写真を撮ってみたいです。秋雪と一緒に来た場所なので私はそれを感じることができると思うのですが、自分以外の人にも秋雪を感じてもらえるようなものが撮れたらうれしいですね。

では最後に、カメラとは、写真とはどのような存在ですか？

大事だったり大好きだったり幸せを感じるものを形にして残せるものですね。そして、大事なものを形に残す方法としては、写真がいいと思っています。写真で残したいし表現したいです。

私は、家族、友達、出会った人や物だけではなくて、自然だったり、目の中に入ってくる心地いいもの、そういうものもちゃんと形に残したいんです。写真を使えばそれができる。思い出は残そうと思えばちゃんと残っていくんです。残せるんですよ。



いずみの学園で先生と遊んでいる様子。  
この頃には思う存分遊べるようになり、  
秋雪くんも学園に行くのが大好きだった



ポカポカの部屋で、ついゴロゴロ、うとうと……



母と息子で出かけるのが夢だった  
という加藤さん。  
夢が叶い、初めて2人きりで  
行った海で撮影した思い出深い1枚



➤ [コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

